

# 対象領域の拡大課題

今年4月、日本プロセス化学会の会長に学習院大学理学部の秋山隆彦教授が就任した。同学会は2001年の創設以来、医薬品などの化合物の製造工程を実験室スケールから工業スケールに橋渡しするプロセス化学に関する情報交換の場として発展してきた。医薬品の研究開発動向の変化や化学産業における環境対応の課題を踏まえ、学会を今後どのように運営していくか。秋山新会長に聞いた。

## 秋山 隆彦 新会長に聞く

「プロセス化学はできるだけ資源を無駄にしない効果的なモノづくりの方法を考える学問だ。対象分野は創薬に限らないが、当学会は医薬品の合成をメインの活動領域としてきた。企業会員が多く、アカデミアよりも企業の研究者が中心と



## 日本プロセス化学会

### 若手への情報発信強化

### コロナ禍前の活気ある状態に

なっているのが他の多くの学会と違うところだ。明日にでも役に立つ生きた情報が手に入るとの声も聞かれ、成功している学会の一つといえると自負している」

を許さないが、コロナ禍において制約を受けた学会活動を以前のような活気ある状態にいち早く戻していくことが最優先だ。まずは大型イベントである夏と冬のシンポジウムを昨年度に引き続きしつかりと実開催で成功させたい。数年内に国

ていく可能性がある。ただ、プロセス化学の重要性が薄れているわけではなく、対象領域の拡大が課題といえる。新たな会員の募集も含め、今後の方針を議論していく。プロセス化学という分野の認知度があり高くないことも認識している。

いくと思われる。講演会のテーマなどとして力を入れていく必要があると考えている」

「資源のロスや廃棄物を減らし、できるだけクリーンな化学をつくっていくことが求められている昨今だが、それはプロセス化学の元来のエッセンスでもある。『グリーンケミストリー』や『アトムエコノミー』など環境課題を意識した概念と昔から向き合ってきた。足元の溶媒や試薬などの高騰も受け、効率よく環境にやさしい製造方法を開発することが一層強く求められており、プロセス化学の重要性は増しているのではないか」

「20年以上の歴史がある当学会をさらに盛り上げて発展させていく責任を感じている。新型コロナウイルスの感染症法上の位置づけがら類に移行した後も予断

際シンポジウムも復活させる方針だ。参加者に満足してもらえような運営を目指していく」

「創薬の中心が低分子医薬から核酸医薬や抗体医薬などにシフトしつつあり、このままでは学会が縮小

「創薬の中心が低分子医薬から核酸医薬や抗体医薬などにシフトしつつあり、このままでは学会が縮小

■…学会の課題は。

■…学会の課題は。

■…産業界でプロセス化学が果たす役割は。

「プロセス化学はできるだけ

なっているのが他の多くの

を許さないが、コロナ禍に

ていく可能性がある。ただ、

いくと思われる。講演会の

移行した後も予断

このままでは学会が縮小

このままでは学会が縮小

（聞き手＝井上諒）